

国内研修報告書

研修テーマ：長岡花火の意義と地域住民への影響

研修場所：新潟県長岡市

1. はじめに

本研修では、新潟県長岡市で開催される長岡花火に焦点を当てその起源や意味、そして地域住民がどのようにその存在を受け止めているのかを、現地での講義や取材を通じて調査した。特に「慰霊・復興・平和」という理念が、どのように花火の中に込められ、地域社会と結びついてきたのかを考察することを目的とした。また、ながおか花火館館長への取材、NPO 法人ネットワーク・フェニックス代表理事へのインタビュー、市民へのヒアリングを行い多角的な視点から長岡花火の意義を検証した。本報告書では、その調査結果をもとに長岡花火が地域に果たしている役割とその持続可能な継承のあり方について考察する。

2. 長岡花火の背景と歴史

本研修では長岡花火の背景や歴史について学ぶため、NPO ネットワーク・フェニックス主催の長岡花火についての講義に参加した。起源は、復興や世界平和を祈るためであり 1945 年 8 月 1 日の長岡空襲は長岡花火の存在意義を語る上で欠かせない出来事であることを学んだ。この空襲により、長岡市は市街地の多くを焼失し 1,489 名もの命が失われた。また講義では当時の記録映像を視聴した。「現在長岡花火が打ち上げられている信濃川に油が流れており焼夷弾の投下により川には火が走っているように見えた」「空襲後友人が悲惨な姿で倒れている所を見たが、頑張れとしか言えず後日その

友人は亡くなってしまった」という被災者の証言は私に強い衝撃を与えた。また毎年8月1日に打ち上げられている白菊という3発の花火がある。白菊には「空襲直後、当時の駅員さんの消火により守り切った鉄道や駅で市外から食物を運び続けていた。したがって長岡空襲は復興がとても早かったため今がある。復興に携わった多くの先人に対して感謝の意味が込められている」と講義内で聞き花火の意味を学ぶことができた。さらに、2004年の中越地震後にはフェニックス花火が打ち上げられ、地震からの復興や全国の人からの支援の恩返しの意味が込められていることを知った。講義以外にも事前に調べた記事には今年は空襲・戦争から80年であり空襲2年後から寄り添ってきた大輪に込められた思いは、音と光と共に見る人々の心に深く刻み込まれ、未来へ受け継がれていくと書いてあった。このように、長岡花火は単なる娯楽ではなく、長岡空襲の記憶を継承し、戦争や災害の悲しみを乗り越えてきた象徴であるという点を、私は講義を通じて深く理解した。

3. 関係者への取材結果

(1) ネットワーク・フェニックス代表理事 大原郁夫氏への取材

本研修では、NPO 法人ネットワーク・フェニックス代表理事の大原郁夫氏にインタビューを行った。同法人は、2004年の中越地震の被災を基に2005年に設立され、フェニックス花火の打ち上げ支援を行っている。資金は主に街頭募金やクラウドファンデ

キングで賄われ、毎年多くの市民ボランティアが活動を支えているという。大原氏は、市民が能動的に関わる意義について「ただ観る花火と、自ら活動してから観る花火とでは感動がまったく異なる」と述べた。これは、花火を単なる娯楽としてではなく、自らの手でつくり上げる地域文化として捉えていることを示している。さらに、マナー向上への取り組みについても説明があった。「世界一マナーの良い花火大会を目指している」と語り、チケットの三段階チェックや記名式の導入など、不正転売や会場内トラブルを防止する工夫が実施されているとのことである。こうした市民参加と高いモラルの維持が、長岡花火を特別なものに行っているといえる。

(2) ながおか花火館 館長 武士俣一樹氏への取材

本研修では長岡花火の歴史と魅力を伝える施設、ながおか花火館館長の武士俣一樹氏に取材を行った。武士俣氏は、施設の役割について「長岡花火の魅力を幅広く発信するためにこの施設が設立された」と述べている。特に来館者に伝えたいポイントとして、「フェニックス花火の全長 2km に及ぶスケールと、その背景にある復興・平和への思い」を挙げた。展示は、最新の資料や映像を取り入れながら随時更新されており、来館者に常に新しい発見を提供できるよう工夫されているという。さらに、武士俣氏は、長岡花火の文化を次世代へ継承する取り組みとして長岡花火伝承会が設立され、日本の伝統文化の後継者不足が問題となっている今地域の文化・歴史継承活動が進められていることにも言及した。

4. 長岡市民へのヒアリング結果

現地での聞き取り調査からは、長岡花火が単なるイベントではなく、市民にとって深い意味を持つ文化であることが浮かび上がった。

高齢者（70代・元教師）「戦争を語り継ぐために長岡花火の話を毎年夏頃になると語っていた。白菊を見ると涙が出る」と語り、特に戦争が身近だった世代にとって平和の象徴であることがうかがえた。

若者（20代・大学生）「SNSで花火の意味を広める努力が必要」と述べ、伝統と現代のコミュニケーション手段の両立を求めている。

小学生（10歳・男の子）「長岡学っていう長岡のことを勉強する授業を受けているから花火の意味は知っている。花火は毎年すごい！」と答え、迫力が子どもにも強く印象を与えていることや長岡学という小・中学校で行われている授業で次世代を担う子どもたちにも歴史が伝承されていることがわかる。

商店主・屋台関係者「屋台も長岡花火の文化！外国人観光客との交流も楽しい。外国人観光客から屋台の料理を褒めてもらって世界に認められている気がする。」と語り、花火大会が地域経済や交流促進の役割も果たしていることを示した。

5. 考察

長岡花火は、市民にとって単なる娯楽を超えた地域の記憶装置として機能していることが明らかになった。世代ごとの受け止め方には違いがあるものの「慰霊・復興・平和」という価値は全員に共通して強く意識されていた。

高齢者にとって、長岡花火は戦争体験と直結している。空襲で失われた命を悼み戦争の悲惨さを忘れないための象徴であり、白菊の打ち上げは単なる演出ではなく深い意味を持っている。この世代は花火を平和教育の教材として位置づけ、学校や家庭で語り継ぐ役割を担ってきた。一方で若い世代は戦争体験の直接的な記憶を持たないため、花火の歴史的背景を学ぶ必要があることを自覚している様子が見え始めた。SNSを活用した情報発信や、デジタル技術の重要性など長岡花火は伝統的価値と現代的手法の融合によって次世代への継承を図っていく必要があるといえる。さらにNPOや花火館といった専門機関による活動は、花火の意味を守るうえで大きな役割を果たしている。市民ボランティアが運営を支え、クラウドファンディングで打ち上げ費用を賄うフェニックスの事例は地域文化の持続可能なモデルといえるだろう。この過程を通じて、花火は見るものから参加するものへと変化し、市民の主体性を育んでいる。

今後の課題は、花火大会の国際化と平和の精神の両立である。観光資源としての価値が高まる一方で、慰霊や復興といった本質的意義を失わない工夫が求められる。たとえば、外国人観光客への多言語ガイドや、配信で花火の意味を発信する仕組みが重要になる。また気候変動や災害リスクへの対応、財源確保といった現実的課題も無視で

きない。結論として、長岡花火は「慰霊・復興・平和」を体現する文化であり、同時に地域社会を結びつける重要な架け橋である。その価値を守りながら、時代の変化に応じて発展させていくことが、今後の長岡市と市民の大きな使命だと考える。

6. おわりに

本研修を通じて、長岡花火が地域社会にとってどれほど深い意味を持つかを実感した。それは単なる華やかなものではなく、過去を語り継ぎ、平和を願う行為そのものである。そして、その理念は市民の努力と参加によって支えられ続けている。この学びを今後の地域づくりや平和教育にどう生かしていくかが、私たちに課された課題である。

【参考文献】

[【長岡花火 2025】空襲・終戦から 80 年、焦土からの復興は大輪と共に 歴史と原点](#)

[振り返る | 新潟日報デジタルプラス](#)